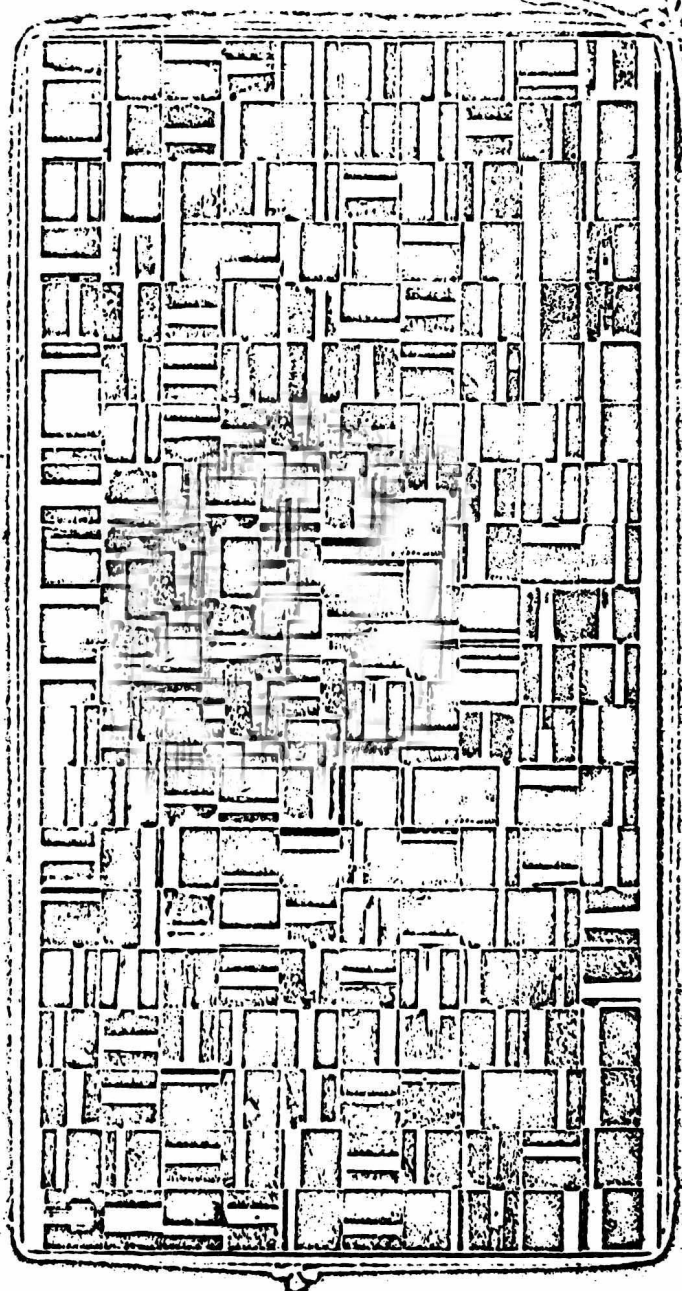


1

鮎川信太郎著作集



鮎川信夫著作集 第一卷
詩集

發行一九七三年八月一日 著者鮎川信夫 装幀粟津潔 發行者小田久郎 發行所株式會社思潮社
東京都新宿区市谷砂土原町三一五 電話東京二六七八一四一 振替東京八一二一 印刷宝印刷
製本岩佐製本 製函岡本紙器 用紙北越製紙 表紙日本クロス © 1973, Nobuo Ayukawa
二刷發行一九七五年一月十日 三刷發行一九七六年七月十日

目次

I 1946~1951

トルソについて

12

日の暮

15

死んだ男

16

病院船室

18

姉さんごめんよ

21

落葉

23

アメリカ

27

「アメリカ」覚書

36

繋船ホテルの朝の歌

42

風景

46

1948年

48

白痴

51

秋のオード

55

行人

57

橋上の人

59

Ⅱ 1952～1954

あなたの死を超えて

淋しき二重

裏町にて

夜と沈黙について

あけてください、どうか

「なぜ？」について

鷗 または夏の手紙

天国の話

夜の終り

今日のなかの昨日と明日

競馬場にて

海上の墓

サイゴンにて

遙かなるブイ

なぜぼくの手が

117 115 113 111 106 102 98 95 92 90 87 83 80 78 74

神の兵士

出港

消えゆく水平線

水平線について

港外

波と雲と少女のオード

夕陽

木枯の町にて

ある男の風景

夏過ぎて

可愛いペニイ

小さいマリの歌

冬物語

紫檀

この街に生れて

この涙は苦い

深いふかい眠り

シンデンの海

162 159 157 155 153 150 145 143 141 138 135 133 131 128 126 124 122 119

父の死

164

III 1955～1958

「バルセロナ」

168

Le Cirque

170

明るいキャフェーの椅子

171

逃げるボールを追って

173

もしも 明日があるなら

175

兵士の歌

180

喪心のうた

184

イシユメル

186

秋思

189

最も暗い月、三月

191

ある記念写真から

193

さざなみは海を渡っても

197

夏を送る即興詩

199

IV 1959～1965

落葉樹の思考

20

もう風を孕むこともない

路上のたましい

戦友

世界は誰のものか

ある冬のはじめに

V 1966～1972

別離のうた

吐く息の

苦しさにたえかねて

呪婚歌

川岸にて

春の感触

夏への挨拶

冷たい雨

新年に

異聞

生き残ったものためのエピタフ

232 229 228 227 225 224 222 220 218 217 216

213 209 205 204 203

アポロ11号に贈る詞

途上

新聞横丁

顔のない夢

首の桶

帰心

閉ざすうた

愛なき者の走法

催涙広場

詩法

My United Red Army

生証人

どくろの目に

宿恋行

VI 訳詩

荒地 T・S・エリオット

プルフロックとその他の観察

T・S・エリオット

262 260 258 255 254 253 251 249 248 246 242 238 236 234

264

J・アルフレッド・ブルフロックの恋歌 291

ある貴婦人の肖像 300

前奏曲 308

風の夜の狂想詩 312

窓辺の朝 317

ボストン・イヴニング・トランスクリプト紙 318

ヘレンおぼさん 319

いとこのナンシー 320

アポリナックス氏 321

ヒステリー 323

騎士的な会話 324

嘆く少女 326

最も真実な詩とは最も装える詩である W・H・オーデン 328

雀たち ヘイドン・カラス 333

サボテン ウイリアム・ガードナー 335

淑女のための鎖のお守り ロルフ・ハンフリーズ 337

あんまりもつれていない蜘蛛の巣 ジェシカ・ネルソン・ノース 339

雪は地上に深い ケネス・パッチェン 341

蛇 セオドア・レトキ 343

解説

鮎川信夫の詩 Ⅱ 大岡信

349

ゆたかな地平線とくるしい黙禱 Ⅱ 渋谷孝輔

370

*

編集ノート Ⅱ 三好豊一郎

384

1946~1951 Ⅰ

トルソについて

肉体の壁

家や樹木のやわらかな影をおとして

腕のつけ根からはじまる

ゆたかな地平線

太陽が沈んでしまうと

影の茂みから闇のにおいが漂ってきた

皮膚だけが燃え

なめらかな蠟は寝台をながれる

固さのない

うすく臉をとじている憂鬱

昨日も今日も 疲れた裸のまましていると

川は音をたてて背中をながれる

その肌の秘密には

彼女だけが触れている

まるで滅びることのないもののように

内部からのひかりをひそかに愛撫している

盲目の手が

まだとおくから押えている性！

しずかに窓をひらけば

春 夏 秋はまたたくまに過ぎてゆく

歴史の銷につながれた老齡！

うすれゆく年々の冬のきびしい日の下で……

壁にかかっている着物からぬけだし

軟体の極限をゆく無数の曲線の戯れ

乳と象牙と林檎とが

やさしいうねりをもって

トルソをとり巻く

すると地球の表面に都市ができる

山や川 またなによりも海ができる

白くあたたかい海

それにむかって傾く地平線

地平線がのせている人間の重たい故郷

揺れて海へ傾く 深くふかく

かすかにトルソから濤の音がひびく

濤のたわむれから

虚空になげあげられた恐ろしき叫喚――

「地平線はどこにある

彼女の位置はどこにある

難破船はどこにある

彼女の憂愁はどこにある」